

門前上屋敷遺跡で 見つかった田んぼや畠の跡

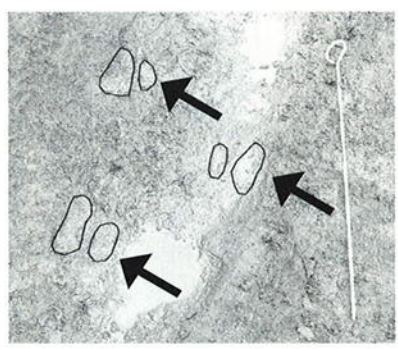
今年の4月から始まった門前上屋敷遺跡の調査は8月31日をもって終了しました。調査の結果、縄文時代から近世までの遺構・遺物を確認しました。なかでも中世の田んぼや畠の跡は残りがよく、目を見張るものがありました。今回はこの田んぼや畠の跡について紹介していきます。

今回の調査では、およそ600㎡の範囲で田んぼと畠が一緒に見つかりました。これらの田んぼは耕作が終わった後、あまり時間をおかず宅地開発に伴う土地造成が行われ、多量の土砂によって一気に埋められていました。このため、埋められる直前の耕作終了後の様子がよ



田畠の様子

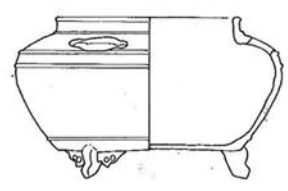
く残っていました。田畠の様子ですが、いくつかの田畠をひとまとめに区画するような大畦があり、それに沿うような形で田畠が整然とつくりだされていました。大畦は10〜40cmほどの礫を置き、この上に土を



牛の足跡の様子(矢印の部分)

を使って耕作が行われていたと考えられます。

盛ってつくられていました。田んぼは傾斜の高い部分を削って平坦にし、傾斜の低い部分に土を盛って畦をつくっていました。また、この田んぼの一部から13×10cmほどの大きさの牛の足跡が見つかっており、牛



風炉

皿が出土していることから、この時代のものと考えられます。さて、これらの田畠ではないか？これを明らかにするため

畠には幅1.5m、高さ10cmほどの広畝や、幅60cm、高さ20cmほどの高畝が残っていました。現代でも畝の形の違いによってつくられる作物が異なっているの、当時から作物によって畝の形や大きさが違っていった可能性があります。これら田んぼや畠の時期ですが、室町時代(15世紀頃)にお茶の道具として使われていた風炉(※)が畠から出土しており、また、田畠を埋めていた盛土の中からもほぼ同時期の土師器の

に、田畠の耕作土中に含まれている種や花粉、細胞の破片を分析していきます。詳しい分析はまだですが、これまでにイネ、コムギ、ヒエ、キビ、ジュズダマ(栽培種であればハトムギ)の植物の細胞が見つかっています。今後の整理によって中世の農業の様子が明らかになっていくのではないかと期待しています。

※風炉 茶の湯で、席上において湯を沸かすのに用いる土製・木製・銅製・銀製の炉(広辞苑より)。門前上屋敷遺跡からは土製のものが出土しました。

鳥取県埋蔵文化財センター
名和調査事務所
〒689-3205
西伯郡大山町西坪字中松堀 179-5
電話 0859-54-2671